KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

版籍奉還別記

ホ 2
5920

明治廿二年十一月刻

明治四年十一月刻

語彙別記

編輯寮

49-2704

門 ホ 2
號 5920
巻

類号 ヲ1ほ
分番 47(1)
番通

語意別記上巻

言語(コトバ)のまたらたるよ十四種あり、さもとわかるよ十種そ
ことたらく故よまづ十種活用をあげて示そ 活語指掌ふ〻ほ とゝらくたり
第一より第八までを作用言といふ第九第十を形狀言とゝ

第一 四段活用

未然言 さかむ 連用言 さかき 終止言連体言 さかく 已然言 さけ

カ行 白字ゝゝゝゝゝゝゝ活用ぬ 紅字ゝゝゝゝゝゝゝ已下皆あ定なり

如此かきくけと四段よ活用く故よ四段活用ゝいふなり

第二 一段活用

未然言連用言 きむ 終止言連体言 きる 已然言 きれ

か きゝ いみのみの一言ゝそれふるれの添りそきるきれ

と活用くゆゑよ一段活用とゐいふなり

第三 中二段活用

か（未然言）おき（連用言）おく（終止言）おくる（連体言）おくれ（已然言）け（命令言）

かくきくといふ二言ふてそれよるれの添りて（おくる）（おくれ）と活用くゆゑよ中二段活用とゐいふなり

第四 下二段活用

か（未然言）うけ（連用言）うく（終止言）うくる（連体言）うくれ（已然言）け（命令言）

かくけくといふ二言ふてそれよるれの添りて（うくる）（うくれ）と活用くゆゑよ下二段活用とゐいふなり 下二段活用ハけくと顛倒してもらくなり

第五 加行變格活用

か（未然言）こむ（連用言）きき（終止言）くる（連体言）くれ（已然言）こ（命令言）

かくこきくといふ三言ふてそれよるれの添りてくるくれと活用くゆゑよ加行變格といふ此活用ハ來といふ言のこの活用なり變格といふハこきくと三段よ活用ゲ他よ異なるゆへよ受る辭も異なるゲ故なり 受る辭の異なるハ圖を見合てもらくし

第六 佐行變格活用

か（未然言）せ（連用言）し（終止言）す（連体言）する（已然言）すれ（命令言）せ

かくせしすといふ三言ふてそれよるれの添りてするすれと活用くゆゑよ佐行變格といふこの活用ハ爲と御坐との二言のみの活用なり變格と云ふハせしすと三段ふ活用

げ他と異なるゝに受る辭も亦異なるゝが故なり 圖を見合せて考へる

べし

第七 奈行變格活用

	未然言	連用言	終止言	連體言	已然言
い往	なむ	に	ぬ	ぬる	ぬれ
か往	なん	なに	なぬ	なぬる	なぬれ

と云四言にそれぞれの添りて ぬる ぬれ

と活用くゆゑに奈行變格と云此活用ハ往と死との活用なり變格と云へ ぬ ぬ ぬ と四段に活用ゞ異なるゝに

ぬれ 已然言 ね 希求使令言 とわかれ又受る辭も異なるゝ故なり

圖を見てそなへ考へし これを三つの變格と云

第八 良行四段一格活用

	未然言	連用言	終止言	連體言	已然言
有	あらむ	あり	あり	ある	あれ

かく らり る れと四言に活用くゆゑに良行四段一格と云

一格と云へども有、居、侍、坐との四言に限りて活用なるがゆゑに常の四段活用の格にそへ連用言ゝ終止と兼たりきれば「京にあり つゝ席

にをり さだまる」など用言より用言へつゞけバ連用言となり又京にあり 田舍にをり などいつゝ終止言としなるゝ

常の四段とかゝり受る辭も亦異なり故に一格と云 此の活用なれば皆ゝ

點をつゝ圖を見合せてそなへ考へし 此の活用なれば皆ゝ 其の辭も

ハ然有、然有、のもと省きて云へ詞にて實ハ郁と云へ詞の活用なれば皆ゝ

に屬

せり

第九 くゝき活用

淺(あ)　連用言　淺(く)　連用言將然言　淺(し)　終止言　淺(き)　連體言　淺(き)　連躰言　淺(けれ)　已然言

かく活用をくゝき活用といふこの活用のなりてく し き の三つをとりいでゝ名とせるなり

第十 ちくちゝき活用

繼(ち)　連用言　繼(ち)　連用言將然言　繼(し)　終止言　繼(ち)き　連躰言　繼(ち)き　連躰言　繼(ちけれ)　已然言

かく活用をちくちゝき活用といふこの活用のなかにて ち し ち き の三つをとりいでゝ名とせるなり、この十種のうち作用言ハ五階、形狀言ハ六階、よりてくさだまりなるちくゝもハ圖のつぎ〳〵いふべし

第一

四段

作用言	咲	押	立	逢	住	降
將然言 一階	か	さ	た	ま	な	ら
連用言 二階	き	し	ち	み	に	り
終止言 連躰言 三階 四階	く	す	つ	む	ぬ	る
已然言 五階	け	せ	て	め	ね	れ
	ぞ	む	し	む	む	ど
	て	つ	け	む	ー	ど
	む	ぬ	ま	な	と	を
	ぐ	ず	ぶ	ど	ど	ど

第二段一

着	似	于	見	射	居
き	ひ	み	ゐ	え	ゑ
ぎ	む	ま	し	な	て
て	つ	け	な	し	

着	似	于	見	射	居
く	ふ	む	ゆ	る	る
らむ	べし	まじ	とす	かな	を
ぬ	に	ぬる	ぬる	ぬる	ぬる
ぬる	ぬる

第五	第六
加行變格	佐行變格
來	爲
㋐ む ぞ む ま し む	㋑ む ま し む ぞ む
㋒ て つ け り む	㋓ て つ け り む
㋔ む ま で う ど と か	㋕ む ら で う ど と か
㋖ に か な を り	㋗ に か な を り
㋘ む ど で	㋙ む ど で

第七	第八
奈行變格	良行四段一格
往 死	有 居
㋚ む ぞ む ま し む	㋛ む ま し む ぞ む
㋜ て つ け り む	㋝ て つ け り む
㋞ む ら で う ど と か	㋟ む ま で う ど と か
㋠ に か な を り	㋡ に か な を り
㋢ で む ど	㋣ で む ど

形狀言

	連用言	連用言 將然言	終止言	連體言	連體言	已然言
一階	み					
二階	く て だ と そ	く				
三階	し と	し	と			
四階	き か な ふ なり を	き				
五階	き か な ふ なり を	き				
六階	ば ど ども	ば	ど			

第九

き し く	深 浅		

第十

き し た く	悲 戀		
み			
く て だ と そ			
し と			
き か な ふ なり を			
き か な ふ なり を			
ば ど ども			

作用言ハ五階形狀言ハ六階なるさゞまりなれど圖面ハ第一階第二階とまるゝもの詳なるこゝハ次ニ示ものゝ如し

○第一階ハ四段活用ニてハき、か、た、ま、ら、等なり一段活用ニてハさ、ち、ね、み、め、み、等なり中二段活用ニ

てゝハあき(起)、か(落)ち、ち(戀)ひ、うら(恨)み、か(老)ゆ、かり(下)、等なり下二段活用ユ

てゝハえ(得)、う(受)け、や(痩)せ、す(捨)て、ね(寝)、ふ(所)、さ(冴)へ、ほめ(褒)、き(着)ら、か(枯)れ、う(植)ゑ、等なり

加行變格ユてゝハこ(來)、佐行變格ユてゝハせ(為)、奈行變格ユてゝハい(往)、

良行四段一格ユてゝハあ(有)らゝ、さゝ、き活用ユてゝハ浅(浅)く、ちゝ、しき

活用ユてゝハ戀(戀)ひ、等なり作用言の一階ハ將然言ユてゝハとむ、とを

へつゝく詞なり

る詞なり形狀言の一階ハ連用言ユてゝ用言

○第二階ハ四段活用ユてゝハさき(咲)、か(押)、た(立)ち、あ(逢)ふ、す(住)ム(降)、等な

り一段活用ユてゝハき(着)、ね(似)、ひ(干)、み(見)、い(射)、ゐ(居)、等なり一段ハ將然ユ連用ユとをかゝ

ねなり中二段下二段もまゝこの定なり中二段活用ユてゝハか(起)き、か(落)ち、

こ(漕)ひ、うら(恨)み、お(老)ゆ、おち(下)、等なり下二段活用ユてゝハえ(得)、う(受)け、や(痩)せ、

す(捨)て、ね(寝)、ほめ(褒)、き(着)ら、か(枯)れ、う(植)ゑ、等なり加行變格ユて

ハき(來)、佐行變格ユてゝハし(為)、奈行變格ユてゝハい(往)、良行四段一

格ユてゝハあり(有)、さゝき活用ユてゝハあさく(浅)、ちゝき活用ユ

てゝハしく(濃)、等なり

○第三階ハ四段活用ユてゝハさく(咲)、か(押)、た(立)ち、あ(逢)ふ、す(住)ム(降)、等

なり一段活用ユてゝハき(着)る、み(見)る、ひる(干)、み(見)る、い(射)る、ゐ(居)る、等なるこ四段

と一段ユてゝハ終止言ユ連躰言ユとひとつゝゝろよかゝぬふゝ

て三階四階もひとつゝゝろよかゝぬなり圖を見てしるべし中二段

活用ユてゝハおく(起)、お(落)つ、こ(漕)ム、うら(恨)む、お(老)ゆ、おち(下)、等なり下二段活

用ユてゝハう(得)、う(受)く、や(痩)ス、す(捨)つ、ね(寝)ル、ふ(所)ル、さ(冴)ヘル、ほめ(褒)ル、き(着)ル、か(枯)る、う(植)る、等

なり加行變格ユてゝハこ(來)、佐行變格ユてゝハし(為)、奈行變格ユてゝハい(往)、

いゆ（往）良行四段一格ゝゝあり（有）、ありとつゞく詞ハ連用と終止言とゝ
と三階と畧圖去ゝゝかゝるゝゝ二階
ゝゝゝゝゝゝゝき活用ゝゝあさし（浅）ゝゝきゝ活用
ゝゝゝゝゝゝゝ（変）し等なり

○第四階ハ四段活用ゝゝゝ（咲）さく、おす（押）たつ（立）、あふ（逢）ゝ（住）ふる（降）、等
なり一段活用ゝゝゝ（着）きる、ゝる（射）ゝる（干）、ゝる（見）ゝる（射）ゝる（居）等なり四段
と一段ゝゝハ三階四階とひとつゝゝゝゝゝゝゝゝ中二段活用ゝゝゝゝ（志）ゝる（落）、
かゝるゝゝと前條ゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝる（変）、うらむる（恨）、おゆる（老）、かる（下）、等なり下二段活用ゝゝゝ（寝）ゝる（受）、
やする（痩）、する（捨）、ゝる（寫）、そる（添）、ほゆる（変）、き（消）ゝる、かる（枯）、う（植）等なり加
行變格ゝゝゝ（来）る、佐行變格ゝゝゝ（為）る、奈行變格ゝゝゝ（往）ぬる、
良行四段一格ゝゝあり（有）る、ゝゝきゝ活用ゝゝあさし（浅）ゝゝきゝ

活用ゝゝゝゝゝ（変）さ、等なり

○第五階ハ四段活用ゝゝゝ（咲）さけ、おす（押）たて（立）、あつ（逢）ゝ（住）ふれ（降）、
等なり一段活用ゝゝゝ（着）きれ、ゝれ（射）ゝれ（干）、ゝれ（見）ゝれ（射）ゝれ（居）等
なり中二段活用ゝゝゝ（志）おれ（死）、
等なり下二段活用ゝゝゝ（寝）うれ（寝）、おれ（老）、かれ（下）、
ゝれ（変）、きゆれ（消）、かれ（枯）、うれ（植）等なり加行變格ゝゝゝ（来）れ、佐行變格
ゝゝゝ（為）れ、奈行變格ゝゝゝ（往）ぬれ、
ゝゝき活用ゝゝあさき（浅）、ゝゝき活用ゝゝゝ（変）き、等
なり

○第六階ハ作用言ゝゝゝゝゝゝゝゝ

しき活用うそふ戀ゆん等なり

らわを作用言の五階、形狀言の六階、といふ圖面を見合せらく心

うなり

つぎふ將然言、連用言、終止言連體言、已然言、と五つ轉たる

意をもつ〳〵も

○將然言といふゆゑんもかあらむともる詞なれば なり、四

段活用の咲といふ詞にて云ひざかを將然言といふ、其さか

ふ辭のれをそへ〳〵云へばさかむとあふこまを俗言ふ譯

せばサカリと云ふ意なり

○連用言といふゆゑんさきりまふなりの類にて用言より用言

へ續く詞なるゆゑなり 用言なり

○終止言と云ふゆゑん語意ふ至りてやめばなり、花さく

「花も」さく、「花の」さく、「花さく」「など語意やめて用言

へも體言へもつゞかず又終止言ハ「も」の「ぞ」「や」「か」の「何」等の係辭なくしてたゞ

終止言といふ 等の結詞なれば上ニ「ぞ」「や」「か」の何等の係辭ある

ことなり

らず次條ニ云ふと見るべし

○連體言と云ふ故ハさく花花さく山とつゞきて用言へハ

續く詞なるゆゑなり 花も山も躰言なり躰言 但し上ニぞ も か の何

「何」とつゞく「なに」「いく」「いつ」「なぞ」「いづ」等の係辭あるゆゑなり

の類なり委しくハ下巻ニ云ふ

詞へその結詞となりて其意と結びとなることなるべし

「花ぞさく」「花やさく」「花かさく」「花のさく」「ゾ」世の春と

うけて花さくと結びとなる類なり、これ「ぞ」「や」「か」「の」何等

の係辭に應ずれば也、係辭もまた上に云ふ詞もサクデアルワイまたサクデアラウと其意の轉

ずることなりうく

あづそひくもぐし

○咲といふ詞は終止言と連躰言との二つとかねる詞なり

其終止言のかゝる「ね」「ゐ」等の結詞となり連躰言のかたい

「ぞ」「や」等の結詞となる連躰言のかたいありともたらの事のかゝるべき解に下

巻を見て知るべし

○已然言といふゆゑに然なることとの詞にそなはる

サイタガマアといふ意なれば也

となり。花さかばとのごとくいまだ花のさかざることあり第一階の詞なり

五階と一階とそれ咲たることと咲ざることとの違ひあり、ただ上に「を」の

係辭あれば「さみ」といふ詞は繰詞となるなり

花を」の辭「ともむすびくもむる」是なり 上に「を」の係辭なくし

てただ「さけ」とのごとくばサイタガヨイと云ふ意なる是也

使令言といふ 使令下知詞なり 又俗にサイテタモレといふ意ちがひ

る是を希求言といふなり以上を作用言の五階といふ 使令希求

のごとくなり下巻にくわしくし

つぎに形狀言の連用言、將然言、終止言、連體辭言、連體言、已然

言、と六つに轉ずる意をもちゐむ

○連用言といふは浅み戀しみ等なり、こは浅きことと戀し

きことの形狀（アリサマ）といふ詞なり、こゝを連用言とつゞけるゆゑに其意用言つゞくが定例なるべし、俗よめどアササニコヒレサニの意なり、但しこの詞體言へいひつゞけたりとも其意い用言へつゞけることもあるべし

りぐゝ（よむ）くゝ（ゐる）ー（ゐる）くゝ（む）ー（め）かり（まむかり）ー（ゐる）かな（むかり）ー（め）

などの（ゐ）は四段活用なりきれどこゝの活用なるゆゑ見ー（みあかり）ー（みくゝ）

ゆゑ〜これを形狀言第一階の連用言とつゞ

○連用言に將然言と兼めていふい淺く戀〜等して俗に淺ク色が染マヅタと云へば連用言にあらざるやうなれど色い熟言なり淺くといふ詞の意い色と云ふ體言へいたりかゝりて染マヅタと云ふ用言へ續けばなりまた淺く戀〜そとゞの

辭をそゝれば將然言ふなるゆゑに第二階の連用言い將然言と兼めていふなり

○終止言といふい淺ー戀ー等なり、そのゆゑい語意さふいなりてやゝびなり「色い」あさー「色もあさー」「色の」あさー「色あさー」と云ひて終止言なり、用言へ體言へもつゞかず（ゑ）（ゐ）の（ゑ）等の係辭を受くその結となるなり

○連體辭言といふい淺さ戀〜等なり、そのゆゑい體の辭（ニシハ）（カ）（ノ）（ヲ）（ヨリ）となるのゆゑを體の緣とふへのみつゞきて山河體の緣のゝゝゝゝゝ下卷ゝゝゝゝゝなどいへゝる體言へつゞきて上に（が）（の）等の係辭あれ

じむそびことぐとなりて其意と結ぶもの。詞となる「ら」

ろ「の」あさ〻さ『人「の」つまなさ』「いと「が」うれしさ』「きく「が」なし

しさ』などの類なり

○連體言といふい淺き戀しき等なり、そのゆゑはあさき心

らひしき人の類にて用言いつぐがざれば也、又上み「を」

「や」「か」「の」「何」等の係辭あるべあさき、らひしき、といふ詞にて

の結詞となりて其意と結びしるこそなる、そいこそ

ろ「を」あさき『こそろ「の」あさき』人のこそろの

「いこで」あさきこと』と結びとむる類なり

○已然言といふい淺けも戀しられ等なり、こい然なれるこそ

○といふ詞にてアサイガマアコヒレイガマアの意なるゆゑに已然

言といふ又上ふ「こそ」の係辭あればあさけれらひしられと

いふ詞はその結び詞となりて其意は結びしるこそなる、

そいこそ人のこそろ「こそ」あさけも』人「こそ」まひしけも』などの

類なり

つぎふ作用言五階ごとふ擧たる辭の用ひざまを示そ

だ〻

○第一階の辭はずむまなむでの五つなり四段活用

にそいさ「か」ずさ「か」むさ「か」まさ「か」なむさ「か」ばといひ

又一段活用にそいき「き」ずき「き」むき「き」まき「き」なむき「き」ばと其意ふ

きうゐて用ふべきなり　已下段ごとふこなるらの定なり　なぞらくてもるべし

○二階の辭ハてつけりなむ〜らの五つといふさきてさき

つ、さきけり、さきなむ、さきぬ〜などなり

○三階の辭ハらむべ〜やりまどなりとかゝあどるくさ

くらむ、さくべ〜、さくやり、さくまど、さくなり、さくと、さく

かゝ等なり

○四階の辭ハかなふなりをなどるて此外なりがふもたまでなふまじ　くあり圖面狀くして舉てく〜　かざるさくハ木編ふいふべし　なるらの類多

と等なり

○五階の辭ハむどぞるの三種なりてさけむ、さけどさけども

等なりらの外も作用言とうるる辭五階ごとふあまども

そハ下卷に示すべ〜又こふ四段活用なるさくといふ

詞をとりいでるふらの詞ゆて〜八種活用のかぎりハおし

るるてらの例なるとを示すしるなり

つぎふ形狀言六階ごふ擧たる辭の用ひざまを示す

べ〜

○形狀第一階の辭うるるうるる辭なし、但〜かなふなりてな

わが係辭へつきてもあなりと定なりと心えべし　どつけていくをいひもるく體言となるあり

○形狀第二階ハあさくむ、あさくて、あさくし、あさくと、あ

さくとて等なり

○形狀第三階はあさ㋕しき、あさ㋕しとて、あさ㋕しかし、あどなり

○形狀第四階はあさ㋕さな、あさ㋕さよ、あさ㋕さなり、あさ㋕さな

どあり

○形狀第五階はあさ㋕きかな、あさ㋕きよ、あさ㋕きなり、あさ㋕きな

どなり

○形狀第六階はあさ㋕けれだ、あさ㋕けれど、あさ㋕けれどかなどあり

以上辭のつゞけざまを示せるなりその意味等のくはしく

きことは下巻よりいへべし

活語自他辨

作用言、形狀言、の活用をもつゝしむふつきてまた示す

べきことあり、をは詞ハ自の詞ハ他の詞あり他の詞ありこれを詞の

自他とゝふ、その自他をこゝきまへまゝでは自他混淆して

ゝがおりふしゝゝと心のまゝゝいひがゝしいひがさはまた

筆とりて物よまゝしがゝよりて今これを示す

○凡自他の詞を四等ハ分ち自の詞を二種とし他の詞を

二種ともその自の詞の一種はみゆる下二段きこゆる下二段あど

なりこゝはよそなるこそ我が目よみゆる我が耳よきこ

ゆるなり、みる四段きく四段などいへば我がみる我がきくよ

てともよ自の詞なりうこゝをもけてみづゝありづゝら

とゝの

自（オガラ）　みゆる　きこゆる

自（ミヅカラ）　みる　きく

これ圖面第一等の　おのづから然る詞　なり

○その一種はみそる（下二段）　きかそる（下二段）　なり我が書畫などとり

いそぐ他よりみそる又我が琴ひきて他よりきそるなどをいふ

自（ミヅカラ）　人よ　みそる　人よ　きかそる

これ圖面第二等の　志かそる詞　なり

○他の詞の一種みそる（下二段）　きかそる（下二段）　等なり他よ狂言

をみそる浄瑠璃ときそるなり又みせそる（下二段）　きかせそる（下二段）　ともいふ他よ狂言をみせそる他よ浄瑠

璃ときかせそるなり、かく二様（フタヤウ）ありといへども其意へ

一つなり

他　ホ　ホ　みる　きく

他　ホ　ホ　みせる　きかせる

これ圖面第三等の　他ホ然せそる詞　なり

○その一種はみる（下二段）　きかる（下二段）　なりこれ我がおのづから

書畫のみる琴のきかるなり、又別よみる（下二段）

きかる（下二段）　といふ詞あり、それ我が書畫と他よみる我が

琴の聞と他よきかるなり、これはいづれも他よ然せる

詞なり今こゝけて初のづからといひ他といふ

自（おのづから）
ふ
ふ
ふ

他（ひと）
ふ
ふ
ふ

こゝまで圖面第四等の（おのづから然せらるゝ詞）（他ゝ然せらるゝ詞）なり

以上自他の四等なり、委しくいうもしるし六等かきどゝあの
づから然るとゝと一等ふたつめおのづから
然せらるゝと他ゝ然せらるゝとを四等よりめくに示す、
圖と見るゝ了知るべし

一等	おのづから然る詞とゝ
二等	物を然せらるゝ詞とゝ
三等	他ゝ然せらるゝ詞とゝ
四等	おのづから然せらるゝ詞とゝ

一等	八種活用混收	然る詞	遊四段 あそぶ 立四段 たつ 習四段 ならふ 解下段 とく 落中段 おつる 亂下段 みだる 隔四段 へだつ 見下一段 みる 聞下二段 きく 思下二段 おもふ
二等	同上	然るも詞	四段 あそぶ 下二段 たつる 四段 ならふ 四段 とく 四段 おつる 四段 みだる 下二段 へだつる 下二段 みする 下二段 きかする 下二段 おもはする
三等	佐行下二段	然せさるる詞	あそばす たてさする ならさする とかする おとさする みださする へだてさする みさする きかせさする おもせさする
四等	良行下二段	然せらるゝ詞	あそばる たてらる ならさる とかる おとらる みださる へだてらる みらる きかる おもはる

をべて然せらるる詞ハ佐行下二段然せらるる詞ハ良行下二段ニ限まること上の圖ニそ明らなれど猶初學の為ニ作用の諸活言より二かゝふるかゝる定格を圖ニ著アラハして示す事左の如し

第四段

咲	か／れる／れと／れば／れよ
押	さ／れる／れと／れば／れよ
立	た／れる／れと／れば／れよ
逢	え／れる／れし／れば／れよ
住	ま／れる／れい／れば／れよ
降	ら／れる／れン／れば／れよ

第下二段

得	え／られる／られし／られば／られよ
受	け／られる／られし／られば／られよ
痩	せ／られる／られし／られば／られよ
捨	て／られる／られし／られば／られよ
寝	ね／られる／られし／られば／られよ
漆	へ／られる／られし／られば／られよ

第一段

着	き／される／られる
似	ふ／される／られる
干	ひ／される／られる
見	み／される／られる
射	い／される／られる
居	ゐ／される／られる

第二段

起	き／される／られる
落	ち／される／られる
戀	ひ／される／られる
恨	み／される／られる

第中二段

擊	ぬ／される／られる
消	ぬ／される／られる
枯	れ／される／られる
植	ゑ／される／られる

第四段

來	こ／される／られる

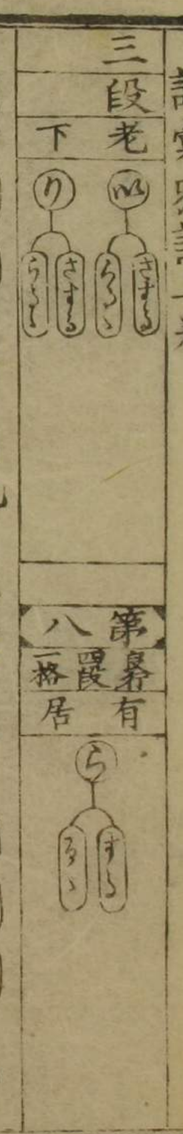
第五加行變格

爲	せ／される／られる

第六佐行變格

往	ゆ／される／られる
死	ぬ／される／られる

第七奈行變格



圖中す〜きる とあるハ他よりかせさする詞なり熟覽して其用法を曉るべし

語彙別記上巻

語彙別記下巻

詞の活用ハ上巻ふ示したまびてよハ辭の運用と示さむとそ辭ハ詞の下ふつきてもらきて詞の意をたすけなしとのつるものあり作用言ハ五階なまび受る辭五階あり、形状言ハ六階なれば受る辭六階あり、その所属をバ上巻の圖ふ著したれども八種活用ハ畧圖してあまびらふ全圖を出せ、まと圖面ふくくきるきるとあなどとの重まらふあるど詞も軽重ありて其意味かられることとも辭の所属ふよりてあらしをむとそあり

○終止言のさくハ軽〜〜そサキマスといふ意、連體言の

さくい重くしてサクワイといふ意終止言のきるハ軽くして
キマスといふ意連體言のきるハ重くしてキルワイといふ意
ふてわるゝ詞もかゝるのごとく意異なり又きちハ
などあるゝも上のきちハ將然言下のきちハ連用言あるゝ
の受ざる異なるもべ心をとゞめて考るべきなり 活語指掌の俗解のところ

作用言

將然言	一階
連用言	二階
終止言	三階
連躰言	四階
已然言	五階

第一段四						第二段一					
咲	押	立	逢	住	降	着	似	干	見	射	居
か	き	た	む	ま	ら	き	ふ	ひ	み	ゆ	ゐ
ぞ	む	ま	なむ	ま	で	ぞ	む	し	なむ		む
き	し	ち	ひ	み	り	き	ふ	ひ	み	ゆ	ゐ
て	つ	けり		なむ	り	て	つ	けり		なむ	り
く	す	つ	ふ	む	る	き	ふる	ひる	みる	ゆる	ゐる
らむ	べし	めり	まじ	なり	と	らむ	べし	めり	まじ	なり	と
く	す	つ	ふ	む	る	きる	ふる	ひる	みる	ゆる	ゐる
かな	に		なり		を	かな	に		なり		を
け	せ	て	へ	め	れ	きれ	ふれ	ひれ	みれ	ゆれ	ゐれ
た	ど			ど		ど					

| 第三 | | |

第六	第七
佐行變格	奈行變格
爲 甕	往 死
㋐	㋑
ぞ む す ぬ む	ぞ む す ぬ む
㋒	㋓
て つ り ぬ る	て つ り ぬ る
㋔	㋕
む べ め と か	む べ め と か
㋖	㋗
に り を	に り を
㋘	㋙
む ど ども	む ど ども

第八
良行四段一格
有 居
㋐
ぞ む す ぬ む
㋒
て つ り ぬ る
㋔
む べ め と か
㋖
に り を
㋘
む ど ども

○形狀言ハ上巻ヨ全圖を出ス

辭すい運用辭ありばそこかざる辭あり（はらくとつかはそいそれ孫と運用きむい）

むめと運用くをいよ　次下よあらそそを圖を見てもつるべし、まるさくと

いよ詞りくこまより以下五階の辭どもふいひつぶけて

その用ひぶりを示しすく俗言を添て其意をも曉をべし

作用言第一階辭

片假字もて書きたるハ俗意を示せるなり以下ら准おなじ

ぬ ナイ	ね ナイガマア
む ウ	め ウガマア
まし マヒヤウ	ましう マヒヤウガマア
なむ ウナラヨイ	
む ウナラ	

花ハ咲ぞ|いふハサカナイといふ意|花ぞ咲ぬ|といふハサカナイワイといふ意|花こそさか|ぬといふハサカナイガマアといふ意なり|花さかむ|といふハサカウといふ意なり

かも|といふハサカウガマアといふ意なり|花ハさかず|といふハサキマシヤウといふ意|花こそさかず|かといふハサキマシヤウガマアといふ意なり|花よさかなむ|といふハサカウナラヨイといふ意なり|花さかむ|といふハサカウナラといふ意なり

作用言第二階辭

て		
つ タ テシマウタ	つる タワイ テシマウタワイ	つれ タガマア テシマウタガマア
けり タヂヤ テキタヂヤ	けるタワイ テキタワイ	けれ タガマア テキタガマア

なむ ウ テイナウ	㊇ テアッタ	
	㊇ テアッタワイ	なめ ウガマア テイナウガマア
		㊇ テアッタガマア

花さきてといふ雅言俗言差別カ〳〵花ハさきつといふハサイタ又サイテシマウタといふ意花ぞさきつるといふハサイタワイ又サイテシマウタワイといふ意花ぞさきたつもといふハサイタガマア又サイテシマウタガマアといふ意なり花ハさきけりといふハサイタヂヤ又サイテキタヂヤといふ意花ぞさきけるといふハサイタワイ又サイテキタワイの意花ぞさきけもといふハサイタガマア又サイテキタガマアといふ意なり花ハさきけなむといふハサカウ又サイテイナウといふ意花ぞさきけなめといふハサカウガマア又サイテイナウガマアといふ意なり

花ハさきけるといふ前ノ年前ノ日サイテアッタといふ意花ぞさきけるといふ前ノ年前ノ日サイテアッタワイといふ意花ぞさきけるかといふ前ノ年前ノ日サイテアッタガマアといふ意なり圖面

ふきを擧ぞ〳〵〳〵を擧ぞ〳〵心えて見るべし

作用言第三階辭

らむ デアラウ	らめ デアラウガマア	
べし	べき ベキ デアラウ	べけれ ベキ デアラウガマア
まう トミエマス	める トミエルワイ	めれ トミエマスガマア

まし マイ	まい マイワイ	まいが マイガマア	
なり ヂヤ	なり ワイ	かれ ヂヤガマア	
と			
かし サ			

花いさくらむといふいサクデアラウとゝ意花そさくら
めといふいサクデアラウガマアとゝ意なり花いさくべーと
いふいかゝて行くもかゝる辭ゝて雅俗差別なし
つゝひざまふまりてサイタガヨイとゝ意のべーあり花ぞ
さくべきといふいサクベキヿデアラウとゝ意花そさくべ
けむといふいサクベキヿデアラウガマアとゝ意なり花ハ

さくやりといふいサクトミエマスといふ意花ぞさくめりと
いふいサクトミエルワイといふ意花そさくめりといふい
サクトミエマスガマアといふ意なり花のさくまじといふいサ
クマイといふ意花ぞさくまじきといふいサクマイワイとゝ
意花そさくまじけむといふいサクマイガマアといふ意
なり花いさくなりといふいサクヂヤといふ意花ぞさくなる
といふいサクワイとゝ意花そさくなりといふいサクヂヤ
ガマアとゝ意なり花さくといふい終止まる詞をゝ
おこして下へつゞくる辭なり、これハ雅俗差別なし花の
さくかといふいサクサといふ意なりてサハ詞の下ふそくく

いふ詠嘆の辭なり

作用言第四階辭

かな	ギヤナア	
小		
なり	ギヤ デアルギヤ	
なる	ワイ デアルワイ	
なれ	ギヤガマア デアルギヤガマア	
を		

花のさくらなりといふハサクギヤナアといふ意なり花のさくふとといふハ雅俗差別なり花ハさくなりといふハサクギヤ

又サクデアルギヤといふ意花ぞさくなるといふハサクワイ

又サクデアルワイといふ意花ぞさくなれといふハサクギヤガマアマア又サクデアルギヤガマアといふ意なりこのなりふハなりむと運用ども三階のなりハなりむといふ運用なり三階のなりと四階のなりと異なるけどもなり花のさくとといふハ雅俗差別なり

作用言第五階辭

ナレ	ソコデ
ど	ナレド
ども	ナレドモ

花さけむといふハサイタガマアソコデといふ意なり、ソコデと解をるが第五階のごの俗意なり花さけどといふハサイタガマア、ナレドモといふ意なり、以上作用言五階の辭の俗解なり、圖面とてらしあわせて心うべし

形狀言の辭も作用言の辭とかゝることなれば別に解と出さぞれ〳〵て知るべし

希求言 使令言之辨

物をもかせとあるゝ詞に二種ありその一種を希求とのふその一種を使令といふかく二種にわかれどもその詞ハひとつなるゆゑ用ひざまふよりて意のかたりてあるひハ希求あるひハ使令となるなり下に出を圖まゝ俗解を見てさとるべし

但し形狀言に希求使令ある事なれば作用言の圖のうを出せり

希求言 使令言 指掌圖

五階

咲 さ(け)ヨ

四段 奈行變格 良行四段一格等ハ

第四	第七	第八
一段	變格	變格
押	奪	罩
立	往	有
逢	死	居
住		
降		
おせヨ	いねヨ	あれヨ
たてヨ	きねヨ	をれヨ
あへヨ		
すめヨ		
ふれヨ		

一階

五階の詞やゝゞて希求使令となる「花よさけ」「ちゝでもあれ」の類なり、ちゝると中昔ちゝと云ふ辭なくてさけよ「あれよ」と云ふこともいで來たれどもちゝふよとそへぞしていふなりさるゆゑに片假字にてあるす

第二段	第中二段
一干見射居	起落戀恨
着似干見射居	起落戀恨
きよ	おきよ
よよ	おちよ
ひよ	こひよ
みよ	うらみよ
いよ	
ゐよ	

一段中二段等は一階の詞よりかならずよとつゞく辭とそくて希求使令となるが定格なり、そは「衣とき」より「親ふ」より「早くおき」より「人をうらみ」よりの類なり

三段老下	四第	
おゑよ	得	ゑよ
おりよ	受下	うけよ
	痩	やせよ
	捨	すてよ
	寢二	ねよ
	添	そへよ
	譽	ほめよ
	消	きえよ

下二段 加行變格 佐行變格等いまゝるゝ ゑ、う け、こ、おえ せ、とよりどそへまてるゝ ゑ、う け、こ、おえ せ、とよりどそへぞ〜て希求使令よいくることもたもとづねるゝ ゑよう け よ こよ、おえ せよ、とよりの辭ごそへていふなり

段	第五	第六
枯	賀行變格	賀行變格
植	來	爲
かれよ	こよ	せよ
うゑよ		せよ

以上希求言使令言の圖なり例のさくといふ詞にて此二つを曉さとふ、さけといふにサイテタキレといふ意なるあり、是を希求言といふまゝにサイタガヨイといふ意なるあり、是と使令言といふさけよりとよりをそくていふもまゝおなじ意

なり、らな此例なるまじわ〳〵てさとるべし

圖面ふ擧なる辭の運用キさ希求言使令言のわらさ〳〵か

くの如し〳〵よく味ひてさとるべし〳〵たゞ〳〵受る辭い此わう

もなわわれどもそのうばうを、わげたゞ初學の輩いかゝ

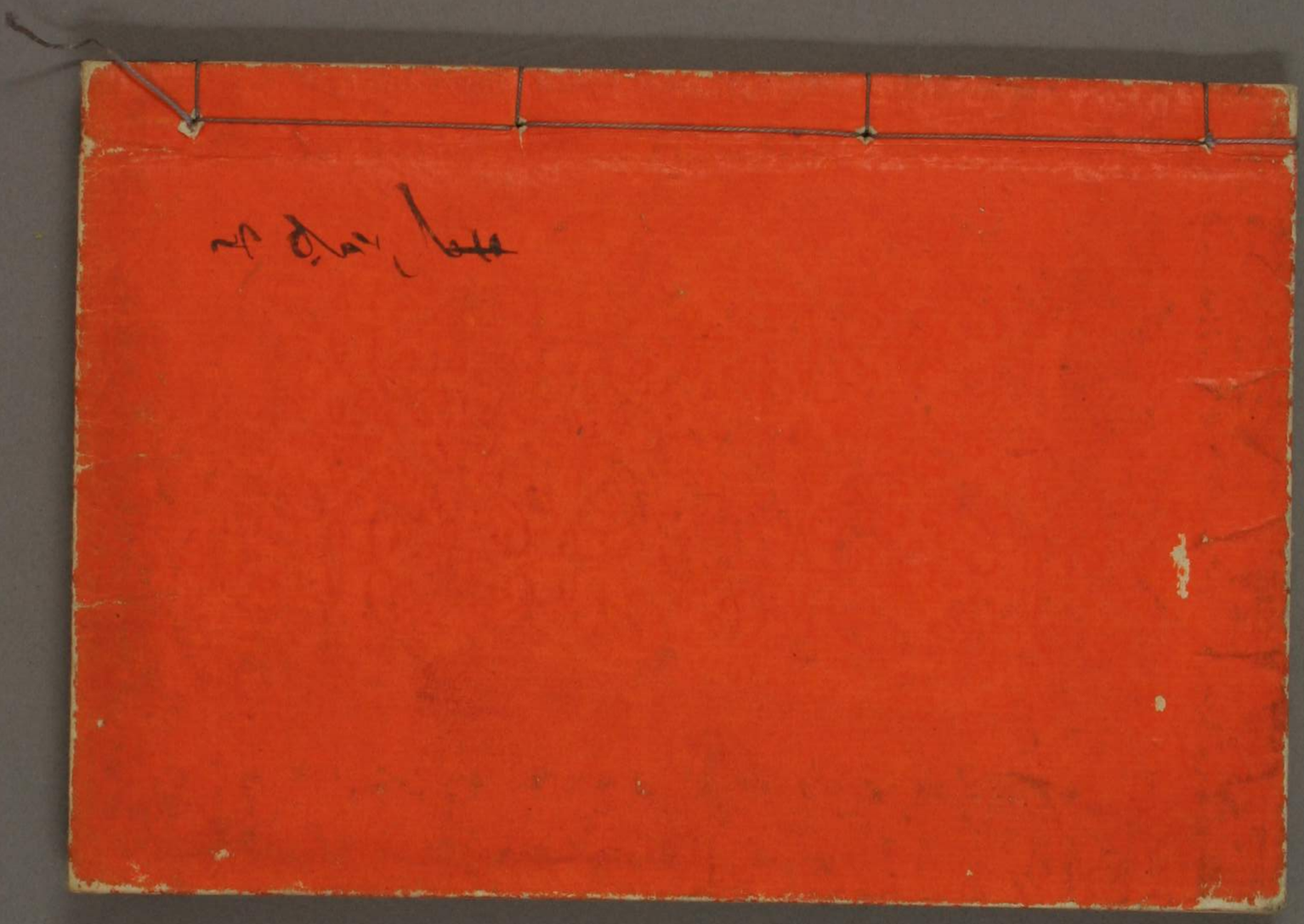
うてさとゝみだられびもぶきろ

語彙別記下巻

明治二十二年十一月三日印刷
同　二十二年十一月七日出版

東京市
目黒伊三郎
京橋區南傳馬町二丁目
五番地

雕刻者
発行兼
印刷者

目黒十郎支店
京橋區南傳馬町二丁目
五番地

販賣所